

経済学史学会ニュース

The Society for the History of Economic Thought Newsletter

No.36

August 2010

幹事会・総会報告

2010 年 5 月 21 日 (金) に常任幹事会・幹事会、翌 22 日 (土) に総会が富山大学で開催されました。今年は学会創立 60 周年にあたり、大会の共通論題として「経済学史の形成」を掲げました。開催校の富山大学をはじめ会員各位のご尽力のおかげで、無事大会を開催することが出来ました。総会は八木紀一郎会員の議長のもと執り行われました。報告事項ならびに協議を経て承認された事項は以下の通りです。

1. 入会を承認された新入会員は 4 名 (新入会員一覧参照) で、退会者は 22 人でした。この結果、5 月 30 日現在の会員数は 712 名です。
2. 2009 年度決算が 2 名の監事 (石井信之、橋本昭一会員) の監査を経て承認されました。また、2010 年度予算も合わせて承認されました。2 ページにあります。2010 年度では、幹事・監事選挙のための予算、60 周年記念刊行物編集・発行のための予算、英文論集編集のための予算が計上されたことと、国際交流基金・機関誌発行基金として例年通りの積み立てを行ったこと、が特徴です。
3. 2011 年第 75 回大会は福島大学で 2011 年 5 月 21 (土)、22 日 (日) に開催されます。開催校を代表して菊池壮蔵会員から挨拶がありました。
4. 2012 年度の大会は関西大学で開催されることになりました。開催校から中澤信彦会員の挨拶がありました。
5. 機関紙編集委員会、企画交流委員会、大会組織委員会、英文論集委員会、学会賞審査委員会、日本経済学会連合評議員、学会創立 60 周年記念事業委員会から報告がありました。6 ページ以下をご覧ください。
6. 第 7 回 (2009 年度) 研究奨励賞は中井大介『功利主義と経済学—ジジウィックの実践哲学の射程—』 (晃洋書房、2009)、『経済学史研究』論文賞は山根卓二「ウィリアム・カッパの科学統合論と実質的合理性—「社会的費用論」の人間学再構成—」 (『経済学史研究』第 50 巻 2 号、2009 年 2 月) に決定し、総会において表彰式が行われました。
7. 独立行政法人 科学技術振興機構 (JST) が実施する平成 21 年度電子アーカイブ対象誌に『経済学史

学会年報』、『経済学史研究』を申請し採択されたこと、これに伴い著作権譲渡のお願いを JSJET ホームページに掲載し、あわせて現会員ならびに既会員 (住所が確認できる方) に著作権譲渡のお願いをしたこと (学会ニュース 34・35 号で報告済み)、電子アーカイブ化の公開が 6 月中に行われること、今後新しい号の追加に伴う措置について、代表幹事から報告があり承認されました。

その後 JST より公開が遅れるとの連絡がありました。アクセスの方法については、次号のニュースでお知らせします。

8. 2010 年度は新監事・監事選挙が行われます。会則に基づき、選挙管理委員長として中野聡子会員、委員に伊藤誠一郎・若森みどり会員が承認されました。なお、新代表幹事・常任幹事の選出は 2010 年 11 月 27 日開催 (於 大阪学院大学) の新幹事会で行われます。
9. 学会のホームページが新しくなり、管理者も赤間道夫会員から原谷直樹会員に交代しました。長年、学会のホームページならびにメーリングリストの管理などにご尽力いただいた赤間会員に対して、学会全体として感謝の意が表されました。
10. 『経済思想史辞典』の買い取りと販売方法については、昨年度の総会で確認されましたが、2009 年度中の販売実績を考慮して、これを改め、①販売価格を 3000 円とすること、②2010 年度以降の新入会員に対しては、会費納入確認のうえ『経済思想史辞典』を進呈すること、が代表幹事から提案され承認されました。そして、富山大学のご厚意により大会受付でも販売されました。『経済思想史辞典』は学会創立 50 周年を記念して総力を結集して作り上げたものであり、出版 10 年を経てもなお十分学問的価値があるものです。まだお持ちでない会員、他学会の方々ご購入を呼びかけます。
11. 入会申込書の書式の変更が提案され承認されました。新しい申込書は、学会ホームページをご覧ください。

2009 年度決算		2010 年度予算	
収 入 円		収 入 円	
会 費	5,997,000	会 費	5,900,000
機 関 誌 売 上	248,795	機 関 誌 売 上	270,000
機 関 誌 広 告 掲 載 料	100,000	機 関 誌 広 告 掲 載 料	140,000
日 本 学 術 振 興 会 助 成 金	1,100,160	日 本 学 術 振 興 会 助 成 金	1,100,000
利 子 収 入	2,675	利 子 収 入	10,000
大 会 報 告 集 売 上	13,500	大 会 報 告 集 売 上	5,000
雑 収 入 (著 作 権 協 会 な ど)	140,182	雑 収 入 (著 作 権 協 会 な ど)	150,000
国 際 交 流 基 金 繰 出	111,848	国 際 交 流 基 金 繰 出	0
小 計	7,602,312	小 計	7,575,000
前 年 度 繰 越 金	7,508,878	前 年 度 繰 越 金	7,230,165
収 入 合 計	15,111,190	収 入 合 計	14,805,165

支 出		支 出	
大 会 費	276,711	大 会 費	350,000
部 会 補 助 費	79,595	部 会 補 助 費	140,000
会 議 費	321,996	会 議 費	600,000
機 関 誌 編 集 ・ 発 行 費	2,716,572	刊 行 物 編 集 ・ 発 行 費	200,000
大 会 報 告 集 編 集 印 刷 費	289,380	機 関 誌 編 集 ・ 発 行 費	3,000,000
事 務 局 費	133,305	大 会 報 告 集 印 刷 費	300,000
刊 行 物 等 送 付 費	1,060,835	事 務 局 費	160,000
名 簿 ・ 学 会 ニ ュ ー ス 印 刷 費	542,590	刊 行 物 等 送 付 費	1,000,000
セ ン タ ー 費	785,820	名 簿 ・ 学 会 ニ ュ ー ス 印 刷 費	260,000
経 済 学 会 連 合 分 担 金	35,000	選 挙 管 理 費	150,000
事 業 費	58,430	セ ン タ ー 費	800,000
研 究 奨 励 賞 賞 金	150,000	経 済 学 会 連 合 分 担 金	35,000
国 際 交 流 基 金	300,000	事 業 費	50,000
機 関 誌 発 行 基 金	500,000	研 究 奨 励 賞 賞 金	150,000
若 手 育 成 プ ロ グ ラ ム	104,000	国 際 交 流 基 金	300,000
経 済 思 想 史 辞 典 買 取 ・ 販 売 費 用	407,631	機 関 誌 発 行 基 金	500,000
予 備 費	119,160	若 手 育 成 プ ロ グ ラ ム	300,000
小 計	7,881,025	経 済 思 想 史 辞 典 買 取 ・ 販 売 費 用	0
次 年 度 繰 越 金	7,230,165	60 周 年 記 念 刊 行 物 編 集 ・ 発 行 費	200,000
支 出 合 計	15,111,190	予 備 費	200,000
		小 計	8,695,000
		次 年 度 繰 越 金	6,110,165
		支 出 合 計	14,805,165

特別基金残高予定
国際交流基金

2009 年度末残高	600,000
2010 年度積立	300,000
2010 年度末残高見込	900,000

機関誌発行基金

2009 年度末残高	1,500,000
2010 年度積立	500,000
2010 年度末残高見込	2,000,000

各委員会報告

大会組織委員会

1. 2011年度第75回大会は福島大学で開催されます。開催日は、2010年5月21日（土）・22日（日）です。
「共通論題」はお休みです。個別の「自由論題」の報告と並んで「セッション」につきましても、自薦、他薦を問わず、奮ってご応募くださいますようお願いいたします。応募の案内は、8月上旬にお手元にお届けする予定です。なお、幹事会での検討の結果、今年度の締め切りは、例年より3週間程度遅らせ、また幹事に対して特に報告推薦を依頼することになりました。したがって、報告希望の締め切りは10月12日（火）の予定ですので、よろしく申し上げます。
2. 2012年度第76回大会は、関西大学がお引き受けくださいました。
3. それに伴い、関西大学の中澤信彦会員が委員に就任しました。

（関 源太郎）

英文論集編集委員会

1. 現在学会の認証を受けている3本の進捗状況をお知らせします。

第5集 The Dissemination of Economic Ideas

第2回 ESHET-JSHET Conference (2009年3月開催) 関連 (西沢保会員、Prof. Heinz Kurz [Univ. of Graz])、Prof. Keith Tribe [Univ. of Sussex]編)

同コンファレンスの後、成果として出版する本のための原稿募集を行った後、レフェリー・プロセスを経たうえで原稿の選択を行い、続いて改訂稿の提出を要請した。現在それらをもとに編集作業中。夏までには出版社に原稿を送付することを予定している。

第6集 Subjectivism in the History of Economics (八木紀一郎、池田幸弘会員編)

すでに経済学史学会所属の日本人と、外国人一名からなる執筆者は確定している。執筆者から提出されたレジュメをもとに、八木会員と池田会員が企画書を執筆し、先般ラウトレッジ社に提出した。その結果、ラウトレッジ社との基本的合意に達している。来年3月末日を原稿の締め切りとし、来年度中の刊行を目指している。

第7集 British Empire, Social Integration and the History of Economic Thought (深貝保則、姫野順一会員、Prof. Martin Daunton [Cambridge University] 編)

Part 1: Territory, Trade and Social Integration of the Empire; Part 2: Negotiating the Strategy for the British Empire の2部構成を考えている。執筆者追加の可能性を探りつつ、他の論文については今年夏から秋にかけて原稿を取り揃える予定である。

2. 本年度は、編集に関連した費用として20万円を計上しています。
3. 出版企画を随時受け付けています。会員の皆様の積極的なご提案をお待ちしています。

（平井 俊顕）

学会賞審査委員会

1. 第7回経済学史学会研究奨励賞の公募（締切2009年10月31日）に応じて推薦された作品は著書1点であり、前年度『経済学史研究』（第50巻2号、51巻1号）で書評対象となり、応募条件を充たした単著が2点あり、計3点を審査の対象とし、審査委員会で慎重に審査した結果、中井大介『功利主義と経済学—ジジウィックの実践哲学の射程—』（晃洋書房、2009）を第7回の研究奨励賞の受賞作と決定した。
2. 第7回研究奨励賞『経済学史研究』論文賞については、『経済学史研究』（50巻2号、51巻1号）掲載の公募論文のうち、応募条件を満たす計4点を審査対象とし、審査委員会で慎重に審査した結果、山根卓二「ウィリアム・カップの科学統合論と実質的合理性—「社会的費用論」の人間学再構成—」（『経済学史研究』第50巻2号、2009年2月）を受賞作に決定した。
なお、上記2名の授賞式は、5月22日の学会の総会で執り行われた。また、受賞作の講評については『経済学史研究』（第51巻2号）に掲載予定である。
3. 2010年度第8回研究奨励賞への推薦募集要項を同封しています。『学会ニュース』第36号到着後から10月30日（土曜日）までの期間、推薦公募を行います。宛先は、以下の通りです。

〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町1-155

関西学院大学経済学部 井上琢智気付 経済学史学会
学会賞審査委員会

E-mail: inotaku@kwansei.ac.jp

（井上 琢智）

企画・交流委員会

前回のニュースから現在まで、2点について活動の報告をします。

1. 2010年3月から、新ホームページ、新メーリングリストが稼働しております。すでに旧ホームページの更新は終了しました。今後は新ホームページ、新メーリングリストをお使いください。

新ホームページのアドレス：<http://jshet.net/>

新メーリングリスト：members@jshet.net

新メーリングリストへの参加者は現在約560名を数えます。今後、学会関係の連絡は新メーリングリストに移行していく予定です。また、メーリングリストの利用に際しましては、これまで同様、利用上のマナーをお守りいただきますよう、お願いします。

参加のご希望、および問い合わせは管理者まで（admin@jshet.net）ご連絡ください。

なお、1997年以来、ホームページならびにメーリングリストの設立と運営を自発的にはじめられ、その後も多大なご尽力をいただきました赤間道夫会員に深く感謝いたします。

2. 2010年度の若手育成プログラムにつきまして次のように概略が決まりました。

日時：2010年10月2日（土）・3日（日）

場所：東京

今回は若手同士の交流を促進するため、合宿形式で行うことにしました。詳細につきましては、メーリングリスト、ホームページであらためてご連絡いたしますので、若手の方は奮ってご参加ください。

なお、内外学会交流につきましては、期間中に学会として行った事業はありません。

（若田部 昌澄）

日本経済学会連合報告

第1回日本経済学会連合評議員会が5月24日（月）に開催されました。

以下の議題が提出され、検討されました。

1. 特別会計事業運営基金の運用について
2. 平成21年度会計決算報告
3. 平成22年度予算案の件
4. 補助審査結果報告
5. 『英文年報』第30号の件
6. 日本経済学会連合創立60周年記念事業の件
7. その他

（平井 俊顕）

60周年記念出版委員会報告

1. すでに『経済学史学会ニュース』35号でお知らせしましたように、「今回の記念論文集は経済学史・経済思想史研究者に限らず、広く他の分野の研究者、学生・院生、一般の読者にも読まれるものを目指し、「現代の経済社会がもつさまざまな問題点を取り上げ、過去の経済学者の学説や思想を捉え直すことで、今後求められるべき新しい経済システムを探る」ために、委員会は以下の現代の問題点を抽出し、各テーマ（順不同）に従って論文集を編集することになりました。
①資源問題、②環境破壊、③市場と倫理、④福祉と社会、⑤グローバル化と貨幣、⑥協同と共生、⑦政府の役割、⑧貿易と国際関係、⑨労働と賃金、⑩知識と教育、⑪少子化とジェンダー、⑫経済学と人間
2. 現在、執筆者の確定作業中であり、教科書としての販売も考慮して、遅くとも2011年2月までに刊行する予定にしています。なお、出版社は未定です。

（井上 琢智）

部会活動

関東部会

2010 年度第 1 回部会

日時：2010 年 4 月 24 日

場所：早稲田大学

参加者：28 名

第一報告「累積過程と期待形成」

報告者：平瀬 友樹 会員（法政大学）

討論者：平井 俊顕 会員（上智大学）

司 会：黒木 龍三 会員（立教大学）

本報告は、ヴィクセルによって定式化された累積過程の分析について、現代経済学的な視点から再検討を行うものである。多くの先行研究がケインズ革命および不完全雇用均衡分析という視点から検討を行うことを目的としていたのに対して、本報告は、企業家の主体的均衡という視点からヴィクセル自身の議論を整理することによって、これまでに見逃されてきた動学的性質について明らかにすることを目的としている。ヴィクセルの累積過程は、このような視点にたてば、静学的な期待に基づいた最適化行動の実現が新たな最適化行動をとるインセンティブを主体に与えるというプロセスの繰り返しとして描写されるのである。したがって、累積過程の分析は不均衡分析として位置づけられることが多かったが、ヴィクセル自身の意図していたものはむしろ均衡動学分析であったと考えられる。

第二報告

合評会：塩野谷祐一『経済哲学原理』（東京大学出版会）をめぐって

司 会：深貝保則会員（横浜国立大学）

コメント 1：八木紀一郎会員（摂南大学）

本書は異端・革新の経済学に対する「前方からの掩護」であると著者は語り、後進を激励する。しかし、根っからマテリアリストである私には、塩野谷経済哲学のアイデアリスティックな性質が気になる。精神と

社会の相互作用を「理念」と「制度」の関連に集約するのは、ウェーバー流に言えば「理念型」にとどまってしまう。経済における累積的諸力、すべての理念を風化させる日常性、そして物質的利害はどこに位置するのだろうか。塩野谷経済哲学の方法は「解釈学的接近」であるが、その解釈の「妥当性」は何が与えるのだろうか。

コメント 2：有江大介会員（横浜国立大学）

氏は、論理実証主義に基づく現代主流派経済学の「科学」の部分性・形式性を批判し、構築される新しい経済学の哲学的基盤を、アリストテレス・カント的な徳論・正義論の立場から「全幅的人間」の価値論、存在論として提示する。しかし、①元々部分理論的科学として成立したのが経済学ではないのか、②経済的社会認識の前提たる哲学的人間把握の内容と理論化の手続き・理論の型とは、「4つの知の体系」（17 頁）のように階層的に断絶しているものなのか、③なぜ出発点がハイデッガーの「投企」「被投」に集約されるのか。

リプライ：塩野谷祐一会員（一橋大学・名誉教授）

1. 八木氏への返答：経済哲学は経済学に対するメタ理論であり、経済学そのものではないことをまず承知されたい。拙著の中心部分である存在論は経済学の課題を先行的に設定する。「理念・制度・存在了解」の解釈学的枠組みは、主体と客体、投企と被投との関係を包摂するものであって、一方的な観念論ではない。「理念と制度」の「理念型」は主流派経済学の枠組みを相対化するために不可欠であり、実在的なプロセスの分析はそれによって定義された個別理論の課題である。存在の意義を問い、問題設定をすることが先決である。解釈の妥当性は道具主義的な目的達成の成功度に依存する。

2. 有江氏への返答：①私の「経済世界像の存在論史」が示すように、古代・中世の「理念・制度・存在了解」の枠組みを狭隘化してきたのが理論経済学の歴史であり、それを当然視するのではなく、批判的に受け止めなければならない。②「4つの知の体系」は、ポスト論理実証主義における重要な3つの関心の転回の広がりを示す。③「大陸哲学」の系譜にそくし

て経済学批判と新しい接近を提起するために、私は反啓蒙としてのロマン主義と歴史主義から出発し、「類型学」と対になる「解釈学」を求めて、ハイデガーの存在論に到達したのであって、いきなりハイデガーから出発したのではない。

関西部会

第 157 回例会

日時：2009 年 11 月 28 日（土）13:00 ～ 17:35

場所：兵庫県立大学神戸キャンパス

（神戸ハーバーランドセンタービル 21 階会議室）

第 1 報告「マグヌソンの『重商主義』(Mercantilism, 1994)について——翻訳を終えての評言」

熊谷次郎会員（桃山学院大名誉教授）

司会 渡辺邦博会員（奈良産業大学）

第 2 報告「アダム・スミスと文明社会」

野原慎司会員（京都大学大学院）

司会 田中秀夫会員（京都大学）

第 1 合評会

発題者 鍋島直樹会員（名古屋大学）

山本英司著『カレツキの政治経済学』

第 2 合評会

発題者 若森みどり会員（首都大学東京）

江里口拓著『福祉国家の効率と制御』

マグヌソンの『重商主義』(Mercantilism, 1994)について——翻訳を終えての評言

熊谷 次郎

マグヌソンによると、重商主義は 17・18 世紀のイギリスにおいて経済成長と近代化にとっての貿易と製造業の役割を強調した言説であり、その時代の政治的・経済的文脈において一定の体系性を備えた学識である。こうした意味での重商主義は、1620 年代にトマス・マン（とミセルデン）による「重商主義革命」をもって登場した。彼らは、マリーンズら「通貨主義者」が示した経済危機の貨幣的説明を否定し、危機を貿易

差額の順調・逆調による為替相場の変動が引き起こす貨幣に対する需給関係から説明した。そして経済の世界が、需給関係において相互に作用しあう価格・賃金・利子率・貨幣価値・為替相場などからなる一つの機械的装置であるという、「新しい経済的言説」を創案した。この経済的言説によって、経済の領域は国家や政治から自律したシステムであるという観念が出現した。しかし非人格的な需給法則に従う「自動均衡的」なシステムの認識は、むしろ自由放任主義とはならず、このシステムが国家と国民に豊かさを提供するためには、為政者の賢明な政策が不可欠であることが強調された。

「重商主義革命」は名誉革命後の政治経済的脈絡の変化と経済諸論争のなかで、「一般的には市場過程、特殊的には外国貿易」がいかんにして国富と国力とを増進するかという「交易の科学」（ジョン・ケアリ）——「雇用差額」、「労働差額」、「外国の支払う所得」といった議論の系論——としてより「成熟した」重商主義言説へと発展した。しかし 18 世紀後半、正貨流出入機構論、自然権をめぐる議論の変容、スコットランド啓蒙思想の興隆などによって、重商主義の経済的言説は衰退していった。

これがマグヌソンの『重商主義』の骨子であるが、このほかに本書では複雑な重商主義論争史的確簡潔な整理や、ドイツとフランスにおける経済的言説の分析など、興味の尽きない新知見や刺激的な議論が展開されている。だが直ちに首肯しかねる論点もある。たとえば、マンの為替相場分析における需給法則論を価格形成全般に敷衍することは『イングランドの財宝』の読み込みすぎであろう。経済的「言説」と「科学」との関係ではもっと緻密な議論が必要であろう。17 世紀末以後の旧植民地体制と「交易の科学」との関係の分析がないのはなぜか。

アダム・スミスと文明社会

野原 慎司

アダム・スミスの著作には、社会の発展段階論として四段階論（生活様式で区別された、狩猟社会、遊牧社会、農業社会、商業社会の四段階の発展する社会という考え方）が存在しているが、他方で未開（あるい

は野蛮) —文明という二段階の社会の段階論も存在する。

このうち四段階理論については、『法学講義』や『国富論』でスミス自身が比較的厳密に定義・理論化して用いている。また四段階理論については、R・L・ミークやイシュトファン・ホント等によりその史的起源や理論的基礎を巡って詳細な研究がなされてきた。さらに、四段階理論のスミス体系における位置づけを巡っても、さまざまな研究がなされてきた。

他方、「文明化した civilized」という語のスミスの用い方そのものには曖昧さが存在する。未開(あるいは野蛮) —文明という対比構図は、『法学講義』や『国富論』のみならず、『道徳感情論』その他にも、方々に散在するように表れている。しかも、その多くは「文明社会 civilized society」や「文明国民 civilized nation」「文明国 civilized country」(あるいはそれらの複数形)等、社会全体の特定の状態を表現する語として重要な用いられ方をされているにもかかわらず、「civilized」という語は意味の厳密な定義がないままに用いられているのである。

拙稿では、スミスが「civilized」の語をいったいどのように用いられているのか、「civilized」な状態とはどのような状態のことを述べているのかということを、アダム・スミスの諸著作を年代順に網羅的に検討・整理した。

山本英司著『カレツキの政治経済学』千倉書房、2009年

鍋島 直樹

本書は、ポーランド生まれの経済学者ミハウ・カレツキ (Michal Kalecki、1899～1970年) の学問的貢献を考察の対象とし、その全体像を明らかにしようとする研究書である。本書の意義として第一に挙げられるのは、これがカレツキの経済学について網羅的・包括的な検討を加えた国内で初めての著作であるということである。これまでに国内でも、ポスト・ケインズ派経済学に関する著作は数多く刊行され、またそれらの書物の多くは、カレツキの経済学上の貢献について多くの紙幅を割いて論じている。しかしながら、全ページを挙げてカレツキの経済学について論じた書物

は今日にいたるまで国内には存在していなかった。

さらに、これまで内外で刊行されたカレツキ研究の著作の大多数は、彼の資本主義経済分析を中心に扱うものであり、本書のように、資本主義経済・社会主義経済・発展途上経済の各々に関するカレツキの分析に総体的な検討を加えた書物はきわめて少ない。この点でも、本書の貢献は価値あるものであると言えよう。さらに本書は、第1章に「カレツキ入門」を配するなど、多くの読者にとって近づきやすいものとなるような配慮がなされているので、カレツキ研究者のみならず、カレツキ経済学の全体像について大まかな知識を得たいと考える専門外の読者にとっても有益な書物となっている。

その一方で、カレツキが世を去ってから既に40年の歳月が流れ、その間に資本主義経済は、生産活動のグローバル化、金融市場の規模と役割の拡大、労使関係の変容など、大きな変化を経験した。したがって、こうした資本主義の構造変化を考慮に入れて、カレツキの分析枠組みをよりいっそう洗練していくことが必要となっている。著者の今後の研究において、現代の経済と経済学の動向を踏まえつつカレツキ経済学の再検証が進められるとともに、それを通じてその新たな発展の方向が明らかにされていくことを望みたい。

江里口拓著『福祉国家の効率と制御』昭和堂、2008年

若森 みどり

本書は、「社会主義の亜種」と分類されてきたウェッupp夫妻(シドニー1859-1947;ピアトリス1858-1943)の思想を、ウォーカー、マーシャル、ピグー、アシュリー、ボザンケ、ベヴァリッジなど同時代の思想家との対照を通して世紀転換期の英米の経済思想の中に位置づけた、画期的な試みである。また本書は、ウェッuppの「議会による官僚組織を含めたガバナンスを通じた『効率』確保という視座」を重視し、彼らの「応用社会学」の手法とLSEの行政学(原価計算、簿記、会計学、財政学)の重点化構想との有機的関連を明らかにした。ウェッupp夫妻は「近代産業社会の特徴を、

人間の『能力』発揮と『欲望』充足という二側面で捉え、両者のスムーズな結合が達成された状態を『効率』的とみなした。「価格」すなわち市場システムでは寄生的産業の肥大化に歯止めをかけることは困難である。経済社会の効率は、社会諸制度の「結びつきの最適化と再調整」を意識的に追求する応用社会学によって実現されるのである。

フロアからは、同時代の思想家との異同やウェブ独自の「効率」概念と「民主主義的制御」に関する質問が相次いだ：効率と公正（正義）とのジレンマといった問題設定は？効率に向けた「連帯」概念の有無について。効率を目指す際に何がインプットとアウトプットの指標となるのか？民主主義は国民サービスの受益者＝消費者民主主義に限定されているのか？再分配の負担や進歩、効率のための負担や犠牲を担う仕組みは？国民に奉仕するとされる官僚のモチベーションは？著者は限られた時間のなかで次の点を強調した。ウェブは公正や正義、連帯や善といった倫理的諸概念を意識的に避けていた。当時のイギリスでは、コールやラスキに流れを汲む倫理的な社会主義が受容されて福祉国家モデルに合流したが、ウェブらの社会主義は、合理的で民主的な社会制度の設計を目指していて、ニュー・レフトの構想、あるいは北欧モデル（スウェーデン）に極めて近い。

西南部会

第 108 回例会

日時：2009 年 12 月 12 日（土） 13：30～17：00

及び 12 月 13 日（日） 10：00～12：00

場所：福岡大学文系センター棟 2 階第 1 会議室

参加者：21 名

12 日

第 1 報告「シーボルト的、ゲーテ的、万有科学者の存在—長崎高商教授武藤長蔵の百学連環—」

報告者：谷澤 毅（長崎県立大学） —非会員—

第 2 報告「アリストテレスの所説と潜在能力アプローチとの対照」

報告者：上山 敬補会員（鹿児島国際大学）

第 3 報告「為替レートのオーバーシュートと新しい開放マクロ経済学」

報告者：山崎 好裕会員（福岡大）

13 日

第 4 報告「中村 廣治著『リカードウ評伝』」

報告者：佐藤 滋正会員（尾道大学）

会員総会

アリストテレスの所説と潜在能力アプローチとの対照

上山 敬補

潜在能力アプローチの提唱者であるアマルティア・センも指摘しているように、センが論じる「潜在能力」という概念と、アリストテレスが論じるエウダイモニア（幸福）は、よく似た内容を持つ。

アリストテレスは、人間の各選択・各行為にはそれぞれ目的があり、それら諸目的のなかに、他の目的のために望まれるのではなく、それ自体のために望まれる最高に善なる目的があるとす。アリストテレスは、この最高に善なる目的こそ、エウダイモニアであり、エウダイモニアは、多くの人の間で意見が一致しているように、理性的な熟慮により価値を認められるさまざまな「善い生き方」をすることであるとされる。また、国制について論じるためには、善い生き方を定義する必要があり、最善の国制は、人びとに善い生き方を保障するものであるとされる。

一方アマルティア・センは、人びとの生活水準を潜在能力によって把握すること、および人間にとって基礎的な潜在能力を保障することを求めている。ここでの潜在能力とは、人びとが理性的な評価を行い、価値を認めた生き方のうち実現可能なものの集合である。以上から明らかなように、エウダイモニアと潜在能力は、人びとの理性的な熟慮によって価値を認められた生き方を構成要素とする点で一致している。また、アリストテレスとセンは、人間にとって重要な生き方を保障することを求めている点でも一致している。

アリストテレスの所説における本質主義は、しばしば批判の対象となる。例えば理性を人間に固有の機能であるとする説明は、人々の評価を拒んでいるとされ

る。このような批判に対して、センと共に潜在能力アプローチを提唱するマーサ・ヌスバウムは、アリストテレスの本質主義は、人びとの評価に依拠する内在的本質主義であるとする。ヌスバウムは、「アリストテレスの本質主義」あるいは「アリストテレス的社會民主主義」と称する立場から、人間らしい生き方を問い、人間らしい生き方の「濃密で曖昧な」リストを作成している。

アリストテレスの所説と潜在能力アプローチには、違いも存在する。アリストテレスは、最高に善なる目的を示すことに焦点を合わせ、優れた活動こそが最高善に相応しいとする。一方センやヌスバウムは、誰の状態が不正義に値するほど困窮しているかを示すことに焦点を合わせ、あくまで人間にとって基礎的な活動を行うことが可能かを潜在能力により把握しようとする。なおアリストテレスやセンには見られないが、ヌスバウムは、人間らしい生き方を直観により選択することを重視する。このことと、ヌスバウムが拠って立つ内在的本質主義との関係は問われるべき問題であろう。

為替レートのオーバーシュートと新しい開放マクロ経済学

山崎 好裕

リーマンショック以降の円レートが均衡値とは思えない変動を示している現状を踏まえ、本報告では、マネーサプライの増加があった場合に為替レートが新しい均衡値に達する前に過度な変化を示すオーバーシュート現象について、その理論的説明の起源となった2論文を取り上げてモデルを通じた解説を行った。ともに1976年に発表されたドーンブッシュ論文とクーリ論文であるが、貨幣市場の均衡式、カバー付金利平価式、外国債券市場の均衡を示す動学方程式が共通である一方で、前者では物価調整に遅れがあることを示す動学方程式が、後者では外国債券需要の調整に遅れがあることを示す動学方程式がそれぞれ採用されている。オーバーシュート現象は、一方で何らかの硬直性が経済に存在し、他方で為替レートが伸縮的である場合に生じることが、モデル分析から理解できる。

これらのモデルに対して、1995年のオプストフェル

ド＝ロゴフ論文では、独占的競争、価格の硬直性（企業は1期間後にしか価格調整できない）、効用関数に変数として実質残高が入ること、というニュー・ケインジアンの特徴から、マネーサプライ増加がその国の恒久的な所得増加をもたらすことが示される一方で、オーバーシュート現象は生じない。それは彼らの「新しい開放マクロ経済学」モデルが、購買力平価が常に成立することを前提にしているために物価変化が為替レートと連動していること、債券が1種類しかないため外国債券の需要調整に遅れが生じないこと、という特徴を有するためである。オプストフェルド＝ロゴフ自身は、非貿易財が独占的競争市場で供給されているときはオーバーシュート現象が起きることを示したが、本報告では国内債券と外国債券の区別を導入しても、「新しい開放マクロ経済学」モデルでオーバーシュート現象を生じさせられることを初めて示唆した。

中村廣治『リカードウ評伝』

佐藤 滋正

- 1) 同書は、著者の第三番目の著作である。「あとがき」によると、いくつかの諸章が既発表論稿よりの掲載となっているが、しかし、例えば前著『リカードウ経済学研究』からのものがほとんど原形を留めぬほど大幅に圧縮されて載録されているように、本書は、第1編から第5編まで459頁にわたって、ほとんど全編書き下ろしとすべき文字通りの力作である。
- 2) 外観的な特徴としては、①リカードウの個人史が理論史とも絡み合わせて平易な文体で詳細に書き込まれていること、②『リカードウ全集』第V巻の議会演説が初めて本格的・網羅的に検討され政治家リカードウの摘出が試みられていること、③リカードウ価値論生成史についての著者の年来の主張の骨格がコンパクトにまとめられていること、があげられる。
- 3) また内容的には、①「再生産の経済学」という著者の理論視座がスミス資本理論との相違および通貨論との関連で一貫して探究されていること、②リカードウ価値論生成史の文献考証の国際的レベルの手堅さ、③『原理』全32章の構成への以後の研究者の参照基準となるべき鳥瞰の提示、が指摘されよ

う。

4) 論点として評者は、①スミスとの関連でリカードウの「外国貿易論」（“一国経済分析”）をどうとらえるか、②『地金高価論』の「金価値の国際的均等配分論」から『原理』での「金価値の国民的相違論」への変化をどう見るか、③リカードウにおける政治領域と経済領域の密着性を考慮して「国家」をどう位置づけるか、④リカードウの政策面での「慎重・

柔軟な配慮」「漸次的段階法」をどう評価するか、⑤「原理」とは「理論」と「政策」との間でそもそも何であるか、の5点を提出した。

5) 当日は、著者と評者および出席者との時間を延長するほどの活発な議論がおこなわれた。

追悼

宮崎犀一 会員

宮崎先生は昨年12月12日に逝去された。85歳だった。数年来体調を崩しておられたが、遂にご回復はかなわなかった。静かに眠るような最後だったとお聞きしているが、私どもも静かに送りするほかはない。

先生は、戦後間もなく『資本論』が圧倒的な権威を誇った時期に、マルクスの「経済学批判プラン」問題を提起して、強力な論陣を張っておられた。基礎理論だけでは資本主義の総体的な分析はできない。国家や国際関係なども考慮に入れた総合的な分析とその体系化の方法を考えるべきだという、問題である。こうした総合的な分析は、アダム・スミス以来の経済学史の巨人たちの資本主義分析の常道であるから、氏の研究関心は、経済原論、経済学史、経済史、国際経済論という広い範囲を包括することになった。これらの領域から素材をくみ取って、『資本論』を基礎にした経済学の体系化の方法を考えたいというのが、氏の強い願望だったのである。

こうした意図のもと、氏の業績はまことに多彩である。氏の名で出された最後の本は『スミスとマルクスからの道』（公孫樹社、2005年）だったが、そこに収められた業績表によると、著書11冊、論文129点、書評紹介120点、翻訳10点、学会や研究会での報告25回、座談会や短評の類い80点が掲げられている。春風駘蕩、飄々とした人柄に見えた先生だったが、休むことなく真剣、真摯、一筋に努力しておられたことがわかる。

私は1970年頃から古典研究会で御指導にあずかることになった。経済思想史上のさまざまな古典を読み、かつ吟味する機会に恵まれた。私にとっては大変貴重な研究会であった。宮崎さんは、決して自説を押しつけることはなく、自由な議論をむしろ自ら楽しんでおられるようであった。この伝統を守って、この研究会は今でも自由闊達な議論を続けている。私は（そしておそらく他のメンバーも同じだろうと思うが）議論の合間に、宮崎さんが例の説得口調で発言なさるお姿を思い出して、寂しさと生命のはかなさを感じることもある。心からご冥福をお祈り申し上げたい。

（和田 重司）

松岡利道 会員

本学会会員で龍谷大学教授の松岡利道氏が、2009年12月13日に、ご逝去されました。本学会の関西部会で交流して以来の古くからの友人として心からお悔やみ申し上げます。思い起こせば、1959年から1969年にかけての10年間は、日米安全保障条約締結をめぐって、また大學管理法案をめぐって、わが国の学生運動が高揚した時期でありました。この頃、学生たちの間では、若きマルクスやハンガリー出身のルカーチの思想への関心とともに、マルクス以後の国際労働運動・社会主義運動の活動と思想への関心が高まりました。関西の大学院生の間でも、ルクセンブルク、パルヴス、カウツキー、ベルンシュタイン、ヒルファディング、レーニンなどの思想と理論が、研究されるようになりました。松岡さんは、このマルクス以後のマルクス主義を研究した世代の代表的研究者のひとりだといえます。主著『ローザ・ルクセンブルク——方法・資本主義・戦争』（1988）は、大学院時代以来のローザ研究の集大成であり、わが国のローザ研究の金字塔ともいえる書物であります。同書では、彼女の思想（理論と実践との関連など）と理論（帝国主義論）の両面について、包括的な研究が行われています。とりわけ、大阪市立大学の大学院時代に指導を受けた、故佐藤金三郎氏や故星野中氏の学風をついで、ローザの思想とドイツ社会民主党内の論争との関連や、書物の草稿・校正刷り・発表論文の異同などについて、精密な文献的かつ理論的分析を行っております。その後、1990年代以後、松岡氏はウォーラーズテインのマルクス論や市場経済論に関心を移しました。ローザの世界資本主義論

に親しんだ松岡さんが、ウォーラースティンの世界経済システム論に関心を寄せたのは、自然の成り行きだったと思われます。こうして、松岡さんは、ローザの世界資本主義論とウォーラースティンの世界システム論に基づき、このグローバル化の時代の国家と市場社会について解明しようとされていました。行政的手腕を期待され、勤務校での大學運営・経営にかかわる仕事をこなしながら、このように研究を進められたことは、驚くべきことです。同氏が、なお活動の時間を得て、その研究を発展させることができればよかったのにと、残念に思っています。心から同氏の冥福を祈る次第です。

(保住 敏彦)

鈴木芳徳 会員

鈴木芳徳会員が2010年2月23日にご逝去された(享年73歳)。九州大学経済学部・同大学院で学ばれ、神奈川大学経済学部へ赴任されたのち、高度成長の過程で大学教育の拡大・大衆化が進み、少子化社会に突入した2007年3月に定年退職されるまで、研究・教育・大学行政の第一線で活躍された。高木暢哉研究室では、信用理論と信用制度論の基礎的研究から金融論と経済学説史のいずれかに専門特化するのが普通であって、マルクスやヒルファディングの信用理論を株式会社体制の中で再検討した『信用制度と株式会社』(1974)に始まり、『証券経済論』(1979)、編著『金融論』(1995)、共著『証券改革』(1991)に続いて、『金融・証券改革の深層底流』(2004)、『金融・証券論の研究』(2004)、『現代証券金融論の課題』(2005)、『証券市場と株式会社』(2007)、『グローバル金融資本主義』(2008)、最後の『現在価値と株式会社』(2009)にいたるまで、理論的基礎に立ち戻りながら、不換通貨制度と株式会社体制下における国内的・国際的な通貨・金融体制のグローバルな展開を分析されてきた。鈴木氏の研究活動の中心は証券経済学会や金融学会であったが、『株式会社の経済学説』(1983)と『明治の取引所論』(1998)は、まさに金融論の専門家による「学説史研究」であり、学説史研究を専門とする人々にとっても核心を突く問題提起とアプローチが提供されている。前者におけるアダム・スミス、J.S.ミルとK.マルクス、後者における田口卯吉、天野爲之と福沢諭吉、ここには経済思想史研究を専門にする者がしばしば気付かずに読み飛ばしかねない論点が、鮮やかに浮き彫りされている。スミスやミルの株式会社論、さらには啓蒙思想家の「取引所論」を跡づけながら、彼らの社会認識や社会改革の理念だけでなく、電子取引に基づくビッグ・バンと国際化がもつ社会体制的な意義をも見定めようという構想なのである。2003年にpancreas carcinomaの手術を受け、厳しい闘病をへて無事回復されて、ようやくもっと自由に古典を読み、若い研究者との交流を深めていく条件が整ったまさにその時、帰らぬ人となった。温かい目で後進の研究者と社会を眺め続けた人ならではの側面は、“To err is human.”というポープの言葉を後書きで引用した『愉快百科』(2010)に溢れている。合掌。

(高 哲男)

小林昇 名誉会員

本学会名誉会員小林昇先生は2010年6月3日に93歳で亡くなりました。小林先生は本学会創設時(1950年)の会員であり、1972-74年に代表幹事を務められました。小林会員は、福島高等商業学校、福島大学、立教大学、大東文化大学と研究機関を通じてはもちろん日本学士院会員としても、ご逝去に至る最後まで日本における経済学史研究の進展のために力を尽くされました。

小林先生が自ら編まれた『小林昇経済学史著作集』全11巻(1976~1989年)はその証でありました。日本ではもちろん、世界でも稀な経済学史についての『著作集』は膨大ですが、いわゆる経済学史の年代史といったものではありませんでした。先生が研究対象とされたのは、イギリス重商主義、アダム・スミス、フリードリッヒ・リストという三本の柱それ自体と、さらになによりもそれらの柱が織りなすデルタ地帯に伏在する問題でした。そしてデルタ地帯に伏在する問題の分析がそれぞれの柱の分析に新たな視角と深みを与

えるという循環が形成されたように思われます。こうした問題の設定自身が、先生が行った戦後日本の経済学史研究の独自の意義を表していると思われます。先生は、こうした問題に分析のメスを鋭くそして深く入れ続けられました。それは、経済学形成の国民的・歴史的個性の検討を通じて、国民経済の構造的な特質を生産力という観点から解明するものでありました。それは、グローバル化が進む 21 世紀の今日に至っても、なお世界が抱え込み、取り組まねばならない重要な課題でもあります。小林先生は、かつて自身の研究方法を「経済史研究における経済学史的接近」と述べられたこともありましたが、生涯にわたる研究の中で「経済学史的接近」のそれ自身の固有の価値を一挙に高められました。

比較的後年になって一度、先生に、私が一番影響を受けた著作は、『フリードリッヒ・リストの生産力論』（1948 年）と『重商主義解体期の研究』（1955 年）のジョサイア・タッカー論とです、と申し上げたことがありました。先生は「若い時のものばかりだね」と言われました。私は、両者の持つ迫力に圧倒されたという思いを忘れられません。そして両者がともに 30 歳代の仕事であったことに、しかもこの間に、リスト『農地制度論』の翻訳と『重商主義の経済理論』でのジェイムズ・ステュアートの斬新な分析とがなされていることに、改めて驚きを禁じ得ません。私は、こうした研究を生み出した先生の日常生活が、太平洋戦争期に一兵卒としてヴェトナムにわたった経験に深く根差した、厳しい自己規制に基づくものであることに、深い感銘を覚えるのであります。心よりご冥福をお祈りします。

（服部 正治）

国際学会

国際学会情報

開催日時を基準として、最小限の情報を掲載しています。募集や参加などをすでに締め切ったものもあります。最新の情報については URL などで確認ください。その他の情報については、
<http://www.iisg.nl/~w3vl/conferences.html> などを参照ください。

●7-9 July, 2010

23rd Annual Conference of the History of Economic Society of Australia, University of Sydney, Australia

●2-5 August, 2010

The Society for the Advancement of Behavioral Economics, San Diego, California, USA
<http://sabe2010.org/home>

●2-5 August, 2010

5th International Conference on Interdisciplinary Social Sciences, University of Cambridge, Cambridge, UK
<http://thesocialsciences.com/conference-2010/>

●22-28 August, 2010

International Congress of Historical Sciences, The 21st Congress of the International Committee of Historical Sciences (ICHS) is organized by Koninklijk Nederlands Historisch Genootschap (KNHG), Universiteit van Amsterdam (UvA), Koninklijke Bibliotheek (KB), and International Institute of Social History (IISH), Amsterdam, the Netherlands

<http://www.ichs2010.org/>

●1-4 September, 2010

Ninth Annual Conference of the History of Women Religious of Britain and Ireland, Louvain Institute for Ireland in Europe
<http://www.rhul.ac.uk/Bedford-Centre/history->

[women-religious/events.html](http://www.women-religious/events.html)

●1-13 September, 2010

13th Summer School on Economic History, Philosophy, and History of Economic Thought, Acqui Terme, Italy
<http://www.eshet.net/index.php?a=29&oc=48&d=328>

●9-11 September, 2010

International Walras Association 2010 Conference, Lyon – TRIANGLE – Université Lumière-Lyon 2, France
<http://www.charlesgide.fr/index.html>

●16-17 September, 2010

The UK History of Economic Thought conference 2010, Kingston Hill Campus, Kingston University, London, UK
<http://business.kingston.ac.uk/het2010>

●22-25 September, 2010

Sixth International Marx Conference: Crises, Revolts, Utopias, University Paris-1 Sorbonne and Paris-West Nanterre
<http://actuelmarx.u-paris10.fr/cm6/index6.htm>

●24-28 September, 2010

Annual Meeting of the Economic History Association: Thinking Comparatively: Economic and Historical Perspectives on Places, Periods, and Institutions, Evanston, Illinois, USA
<http://eh.net/eha/meetings>

●11-12 October, 2010

Joint Conference the European Society for the History of Economic Thought with the Society for the Chinese History of Economic Thought, Wuhan University, China

●18-21 November, 2010

35th Annual Meeting of the Social Science History Association, Chicago, Illinois, USA

<http://www.ssha.org/>

●2-4 December, 2010

Sraffa's Production of Commodities by Means of Commodities 1960-2020: Critique and

reconstruction of economic theory, Rome, Italy

<http://www.eshet.net/index.php?a=28&oc=9&d=327>

●13-14 January, 2011

International Workshop from Past to Present: The Foundations, Definitions and Usages of Perfect Competition, Paris, France

<http://www.eshet.net/index.php?a=32&oc=40&d=334>

34

●31 March - 1 April, 2011

Urban History Group Annual Conference, Robinson College, University of Cambridge, UK

<http://www2.le.ac.uk/departments/urbanhistory>

</uhg/conference-2011/conference-2011>

●1-3 April, 2011

Economic History Society Annual Conference, Robinson College, University of Cambridge, UK

<http://www.ehs.org.uk/society/annualconferenc>

<es.asp>

●19-22 May, 2011

Conference on Historical Analysis and Research in Marketing, New York City, USA

<http://faculty.quinnipiac.edu/charm/2011%20Ca>

<11%20for%20Papers.htm>

●20-21 May, 2011

European Association for Banking and Financial History Annual Conference, Amsterdam, the Netherlands

(赤間 道夫)

編集後記

学会事務局を与ることになって、早2年目の夏です。日本では猛暑、ロシアでも平均気温を大幅に上回る記録的な猛暑、中国では大雨、南米では大雪という中、なんとか編集後記を書くところまでできました。富山大学での60周年記念大会は、列車の不通などアクシデントもありましたが、当番校のご尽力のおかげで、盛況のうちに終了することができました。大会の運営はもちろん、自治体に対する補助金申請や事務局からの依頼など手間のかかるお仕事を快くお引き受けいただいたことを思うに付け、学会に対する会員の熱意の強さを感じる次第です。事務局としてもそれに負けない情熱を学会運営のために燃やす覚悟です。いつものように、短期間にニュースの原稿をいただいた、常任幹事、部会幹事、原稿依頼会員に、厚く御礼申し上げます。大学の授業期間が延びて、じっくりと古典を読む時間とゆとりを作るためには、日常生活を厳しく律する以外には方法はなくなりつつあります。暑い夏、会員の皆様のご健康を祈ります。

(服部 正治)

経済学史学会では下記のホームページとメーリング・リストを運用しています。

- ・ホームページ

<http://jshet.net/>

- ・メーリング・リスト

現在約 560 名の会員の方が参加されています。アドレスをお持ちの方は、ぜひご参加ください。参加希望の方は、企画交流委員会 (admin@jshet.net) にご連絡ください。

『経済学史学会ニュース』第36号

2010年8月8日発行

経済学史学会 代表幹事 服部 正治

事務局 〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

立教大学経済学部服部正治研究室

TEL : 03-3985-2287 FAX : 03-3985-4096

E-mail : hattorim@rikkyo.ac.jp

連絡先 学協会サポートセンター

〒231-0023 横浜市中区山下町194-502

TEL : 045-671-1525 FAX : 045-671-1935

E-mail : scs@gakkyokai.jp
